

外来の教育相談に参加する大学生への教育効果
—— さんさん教室の参加学生へのアンケート調査より ——

今津 麻衣・氏間 和仁

『特別支援教育実践センター研究紀要』 第19号 別刷

広島大学大学院人間社会科学研究科附属特別支援教育実践センター

The Bulletin of the Center for Special Needs Education Research and Practice No.19
Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University
March 2021

<実践研究>

外来の教育相談に参加する大学生への教育効果

—— さんさん教室の参加学生へのアンケート調査より ——

今津 麻衣*・民間 和仁**

本研究は教育相談に関わる年数が教育効果に与える影響について明らかにすることを目的としている。大学生・大学院生等が教育相談に参加したときの教育効果についてアンケート調査(28名)を実施し、指導力、ICT活用能力、将来への活用について調査した。その結果、2年以上教育相談に携わる学生の方が教育効果は高いことが明らかとなった。2年以上関わった学生は卒業生と同様の結果が得られており、卒業後の教職への活用も期待されることが示された。数回、教育相談に参加するだけでもある程度の効果はみられるが、数年継続することで、効果が確立すると考えられる。この結果を生かし、これからも教育相談に参加する学生が教職に活用できるよう指導することを心がけていきたい。

キーワード：教育相談、教育効果、大学生、ICT

I はじめに

1 背景

広島大学大学院人間社会科学研究科附属特別支援教育実践センター(以下、本センター)は、特別支援教育についての基礎的・実践的な研究や教材開発を行うことや、教育相談・臨床、特別支援教育を専攻する学生への臨床指導、現職教員などへの研修を行うこと、そして関係機関と連携しながら地域の教育・福祉に貢献することを目的として設置されている。本センターでは、教育相談・臨床や研究、現職教員や保護者向けの研修や講演会、障害のある子どもたちのための教材開発を行うことによって、学校や地域に貢献することを目指している。

民間研究室は、本センターに属しており、教育相談及び学習支援活動を行っている。本稿では、その実績と学生指導への効果との関連について報告する。文部科学省(2010)の「生徒指導提要」によると教育相談とは児童生徒それぞれの発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長への援助を図るものであるとされている。教育実習で授業や指導における成功体験を積み重ねることで教師効力感の向上に寄与することが明らかにされている(西尾・安達, 2015)。教育実習では実習前の予想よりはるかに楽しく、意欲的に過ごせる人

が多いことが明らかになっている(今榮・清水, 1994)。さらに教員志望動機を強めた学生は弱めた学生より有意に多いことも明らかとなっている(今榮・清水, 1994)。実習と教育相談は全く別物であるが、どちらも児童生徒と関わる点、事前に計画を立て児童生徒と関わる点が共通している部分であるといえる。本研究では教育相談における学生の教育効果について明らかにする。

2 外来指導状況

民間研究室が担当した外来者数を Table 1 に示した。第二著者が本センターに着任した当初、年間の利用者数は3名であったが、2014年からは100名を超え、2019年からは300名を超えて、現在に至っている。

教育相談では、障害のある乳幼児・児童生徒および成人の学習上・生活上の困難の評価とそれに応じた解決策の提案を行っている。学習支援では、提案した解決策の習得を促すための指導を行っている。特に民間研究室が行う教育相談および学習支援の特徴は、ICTを積極的に活用した解決策の提案と、その活用技術の指導である。例えば、どんなに頑張っても紙に書かれた文字を読むことが難しい場合、視覚障害の場合は大きくして読む方法、学習障害がある場合は合成音声等で読み上げる方法を提案したりする。書くことに困難がある場合、キーボードや音声を使って書く方法を提案したりする。併せてそれらの方法の習得のための学習支援を行うことで、単に提案するだけでなく、実質

* 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期学習開発学専攻

** 広島大学大学院人間社会科学研究科特別支援教育学講座

Table 1 民間研究室が担当している教育相談利用者数

(延べ人数)

年	弱視	盲	発達	知的	肢体	合計	累計
2011	3	0	0	0	0	3	3
2012	5	0	0	0	0	5	8
2013	55	2	0	0	0	57	65
2014	70	37	0	6	3	116	181
2015	57	62	29	0	7	155	336
2016	130	20	73	1	5	229	565
2017	170	7	100	11	0	288	853
2018	124	6	108	25	0	263	1116
2019	84	1	219	59	0	363	1479
2020	27	4	234	38	0	303	1782

(2020年11月29日現在)

的に学習環境の改善を図っている。

これらの提案及び指導の方法とその効果は、広く全国から注目されている。民間研究室の教育相談の利用者の居住地は、広島県内はもとより、札幌、富山、静岡、石川、愛知、京都、大阪、兵庫、鳥取、香川、愛媛、高知、福岡、熊本、長崎に及ぶ。その紹介元は、在籍学校はもとより、眼科、小児科の医院、県立病院や大学病院等の総合病院、療育センターなど、教育機関のみならず県内外の医療機関に渡る。さらに、眼科病院や大阪医科大学 LD センターから招聘され、教育相談および学習支援活動を行っている。これらのように、広くその効果が評価されている。さらに、新聞社やテレビ局などのマスコミからも注目され、新聞や番組などで取り上げられてもいる。このように様々な場所、様々な障害の児童生徒と関われるのが民間研究室の教育相談の特徴である。

3 目的

このような特徴のある民間研究室の教育相談に参加した学生が感じる教職の魅力、指導力の深まりが実践力に結びつくかを調査し、教育相談に参加することの教育的意義を明らかにすることを目的とした。

II 方法

(1) 指導の内容

本センターは、教員を目指す学生を研修相談員として登録し、外来サービスに携わることを通して、実践力の向上や教職への意欲の向上に貢献することを目的の一つとしている。

民間研究室で指導している学生（研修相談員）は、平成30年度までは毎年10名前後、令和元年は15名、令和2年度は28名である。はじめは、第二著者の指導の様子を見学させ、記録係を担当し、振り返り会や準備などの手伝いを行う。5回程度記録を担当すると、新規の利用者の中で、比較的定型的な指導法の適用可能性が高いケースを担当することとなる。これを民間研究室では主担当と呼んでいる。学生が主担当をする場合、事前の打ち合わせ、指導計画と教材を作成した時点での打ち合わせ、実践、事後の打ち合わせ（振り返り）を民間と個別に行っている。事後の打ち合わせでは、指導の様子を録画したビデオを民間と学生で供覧しながら指導内容について振り返り、学生の指導の優れた点と次回へ向けての改善点を打ち合わせている。学生が主担当をする場合、指導当日は、主担当の他に、記録係、撮影係を1つのユニットとして編成し、指導を行う。これは、他の学生の指導の様子に触れることで学びの機会を確保することと、チームでの業務遂行の経験を積むことを狙いとしている。民間研究室はこれらの教育相談及び学習支援活動を土日に開催することが多く、その愛称として「さんさん教室」と名付けている。

(2) 指導効果のアンケート

「さんさん教室」に参加したことのある在学生18名（教育相談歴1年未満が9名、2年以上が9名）および卒業生10名を対象としたアンケートを実施した。実施日は2020年7月10～11日だった。アンケートは、1 教育相談による教職の魅力の高まりについて（1項目）

- 2 特別支援の子供たちの指導について（5項目）
 - 3 教育での ICT 活用指導力について（5項目）
 - 4 将来への貢献について（1項目）
 - 5 オンライン指導について（6項目）
- の5項目で構成された。各項目は、「1：全くそう思わない、2：そう思わない、3：どちらともいえない、4：そう思う、5：とてもそう思う」の5段階評定であった。質問項目は、在学生には「身につけている。」や「学べている。」など進行形で、卒業生には「身についた。」「学べた。」など過去形で設定され、基本的な文章は同じであった。

Ⅲ 結果および考察

表と図で結果を示した。詳細な結果は、Table 2、3に示した。グラフの中で「学生：2年以上」は、在学生で民間研究室の教育相談に2年以上参加したことを、「学生：1年以下」は、今年度から参加していることを意味している。「卒業生」は、学部卒業生、特別専攻科修了生、大学院修了生であった。「学生：1年以下」は9名、「学生：2年以上」は9名、「卒業生」は10名から回答が得られた。なお、卒業生の中で、教職に就いている者は8名であった。

Fig. 1に教職への魅力の高まりを尋ねた。「教育相談により教職の魅力が高まっている。(高まった。)」に対する回答は、「卒業生」「学生：2年以上」ではポジティブな回答が9割であり、「学生：1年以下」は5割がポジティブな回答であった。教育相談の経験期間が1年を超えると、教職への魅力が高まっていることが考えられる。つまり、民間研究室の教育相談を経験することで、教職への魅力が高まり、それは、卒業後も確認できる効果であることがうかがえる。

特別支援教育の指導力 (Fig. 2) および教育への ICT 活用力 (Fig. 3) の獲得状況については、5項目の結果を合計し5段階ずつで度数分布表を作成し、結果を帯グラフにして示した。

どちらの項目も5段階評定の5つの下位項目を合計した結果を示した。評定合計が21以上、25以下の高評価をした回答の数は、卒業生では80%、学生：2年以上は44%、学生：1年以下は11%であった。特別支援教育での実践力および教育における ICT の指導力の獲得に対する教育相談の効果は、学生：1年以下、学生：2年以上、卒業生の順で高くなっていった。このことから、教育相談がそれぞれの指導力の獲得に対する効果は、教育相談の参加期間により向上し、さらに卒業後、さらにそのことを確認できることが考えられる。教育相談に参加することは、卒後の指導力に大きく貢献していることが卒業生の回答から得られたことから、教育相談に参加することは教職に就くための実践力の向上において教育効果が高いことがうかがえる。

Fig. 4に将来への貢献について尋ねた。「教育相談により教職の魅力が高まっている。(高まった。)」に対する回答は、「卒業生」「学生：2年以上」ではポジティブな回答が10割であり、「学生：1年以下」は5割がポジティブな回答であった。教育相談の経験期間が1年を超えると、教職への魅力が高まっていることが考えられる。つまり、民間研究室の教育相談を経験する

Fig. 2に指導力の獲得について尋ねた。この結果は、卒業生では80%、学生：2年以上は44%、学生：1年以下は11%であった。特別支援教育での実践力および教育における ICT の指導力の獲得に対する教育相談の効果は、学生：1年以下、学生：2年以上、卒業生の順で高くなっていった。このことから、教育相談がそれぞれの指導力の獲得に対する効果は、教育相談の参加期間により向上し、さらに卒業後、さらにそのことを確認できることが考えられる。教育相談に参加することは、卒後の指導力に大きく貢献していることが卒業生の回答から得られたことから、教育相談に参加することは教職に就くための実践力の向上において教育効果が高いことがうかがえる。

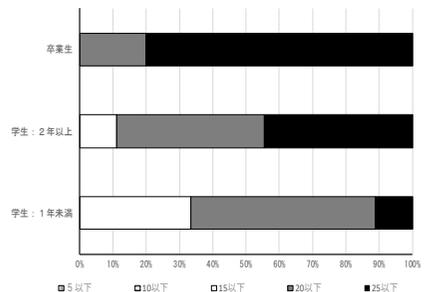


Fig. 2 指導力の獲得について

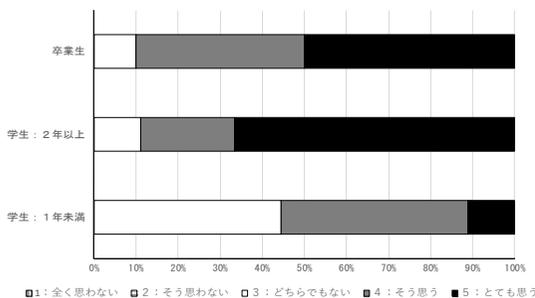


Fig. 1 教職への魅力の高まりについて

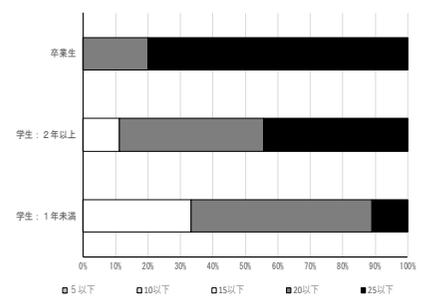


Fig. 3 教育への ICT 活用力の獲得について

ことで、教職への魅力が高まり、それは、卒業後も維持される効果であることがうかがえる。

学生：1年以下の自由記述は以下の通りである。

- 子供たちの困難さに対して、どのようにICTを活用することが効果的か、また、その必要性を自身が感じ、今後の教育に必須であると感じたため、より学びたいという意欲が出た。
- 様々なニーズを持つ子どもへの関わり方だけでなく、教材準備やオンラインで授業を行うために必要な設備等についても学ぶことができたので、これから色々な形態の授業に学んだことを生かせると思いました。
- さまざまな子供の実態に合わせた指導方法を見学でき、指導に関する知識を増やすことにつながると思うから。教育におけるICTの実際的な活用方法を学ぶことができるから。
- ICT活用を行う際にそれぞれの子どもに合わせた方法を考える視点が特に活かせる部分になるのではないかと感じた。
- コロナが終息したら、授業でのICTの活用やオンライン授業の需要が高まると思います。それらを使った授業の様子を見学することで、雰囲気や進め方、生徒への質問の仕方、生徒からの質問の返し方などを活かそうと思いました。
- まだオンラインさんさん教室を2、3回見学させていただいたのですが、オンライン授業向けの教材準備、教える側の先生や先輩の手元の見せ方、子供たちの手元は確認できない中での話の進め方、またその時のやりにくい部分などを知ることができた点です。
- ICT活用時だからこその声のかけ方を学ぶことが出来ると思います。

わずか、2・3回の見学であっても、教育相談への

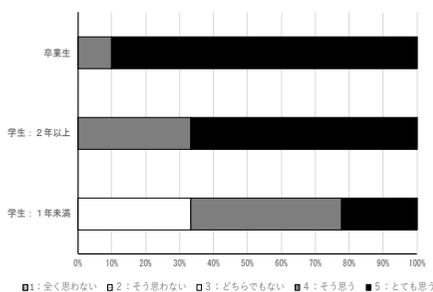


Fig. 4 将来への貢献について

参加が教職に就くことを志望する学生の教職に対する理解の促進に貢献していることをよく表している記述ばかりである。

学生：2年以上の回答は以下の通りである。

- 紙と鉛筆や口頭の会話だけでなく、ICTの活用も含めて、児童生徒の読み書きやコミュニケーションの能力を評価すること。またICTを使用することで幅広く個別に合った学習方法を指導者が検討すること。
- 学童で学習支援を行う際に、よりその子の苦手に合わせて、粘り強く説明できるようになった。児童が問題を解く際の様子などを見た経験から、つまづきの原因や不安に思っている箇所を推察することに生かせると思った。
- 将来、教師となった際、学習に困難のある子どもをみつけ、その子どもにあった支援を考えることに生かせると思う。また、学習に困難を抱える子どもの保護者への適切な対応をするための練習にもなっていると思う。
- 一人ひとりに合った支援の考え方、多面的にアプローチする方法などを生かせそうだと考えます。
- 将来、担当する子どもたちの実態把握や指導方法の検討、実施した指導の評価や改善などで生かせると思います。ICTの活用方法についても学ぶことができたため、支援方法の幅が増えました。以前に比べて、一人ひとりのニーズに合った支援を行うことが可能になったと思います。
- 将来教科的な目標と特別支援の目標が有れば、必要な時に、どのように支援するのかを計画を立てたり、授業中にも今まで学んだことから発言したりすることに生かせると思う。

学生：1年以下の群とは異なり、評価、計画立案、実践、振り返りを教育相談の中で経験する中で、実践力が身につけていることを表す記述である。

卒業生に対して、「現在の仕事に活かしていること。」に対する記述は以下のとおりである。

- 指導の方法、合理的配慮の考え方、実態把握
- 大学生の時に、当事者の方やその保護者と継続的にお会いするよい機会となった。特に保護者とお話しすることができてよかった。今は懇談等に生かしていると思う。
- ICTの効果的な使用方法が分かった。分からない

くてもとりあえず試してみる大切さが分かった。氏間先生や先輩、同級生、後輩の指導を直接見ることで、指導や言葉かけの仕方を学べた。氏間先生やゼミ生と反省会をすることで、意見を言う力がついた。保護者との接し方が分かった。具体的な指導方法が分かった。どのような提案をすればよいか、自分で考えようとする力がついた。

- 視機能評価の仕方。視機能評価について、iPadで簡単にできること。ICTを使って要望に応えられること。
- ICTの教育への活用およびその啓発。幅広い子どもたちとの関わり方や指導方法や評価の仕方。
- Apple製品をはじめとした、特別支援教育に関わる可能性のある情報収集力、また、アプリを探す技術及び根気、活用するために機能を調べる習慣が身についた。大学生活を通して身につく力ではあるが、教育相談に携わると意図せずとも高まる。現在、とても役に立っている。
- それぞれの利用者の背景なども踏まえた上で、適切かつ現実的な支援の方法を考えること。
- 教職以外についているので、検査の方法や指導法などを活かすことはできませんが、教材を作る過程で知ったパワポやワードの機能についての知識は役に立つことがあります。また、木村眼科や弱視の児童の教育相談等の経験があったから、資料等を作るときには文字の字体や大きさ、配置、配色などが誰からも見やすいものになるよう、気をつけることができていると思います。
- 一人一人の困難さにとことん寄り添い、支援のあり方を模索していく姿勢。ICTの具体的活用方法。合理的配慮の提供。

実際に、就職し、教育相談で身についたことが、どのように活かされているか、その内容が具体的に記されている。特に、保護者との関わりや、授業づくりの姿勢などは、在学生にはみは見られない記述であり、卒業後確認できる学びであると考えられ、そのような学びを本教育相談で身につけられていることが確認できた。

最後に、2020年3月から、外来サービスを停止したことによって始まったオンラインでの教育相談や学習支援について、参加している学生に尋ねた。結果をFig. 5に示した。

質問項目は、

- オンライン指導に参加して、その必要性を感じま

したか。

- オンライン指導に参加して、教員として身につけておくべきだと思いましたか。
- オンライン指導に参加して、特別支援教育や不登校など個別的なニーズへの対応にこの技術は必要だと思いましたか。
- オンライン指導に参加して、オンラインでの指導の方法を身につけたいと思いましたか。
- オンライン指導に参加して、オンラインでの指導は目的に合致した内容であれば効果的だと思いましたか。
- オンライン指導に参加して、オンラインでの指導のための指導上のノウハウがあると思いましたか。

これらの項目には、オンライン指導に参加した13名が回答した。そのすべての項目で、「指導法を身につけたい」「必要性を感じる」の2項目以外は、全員がポジティブな回答であった。新たな社会様式の中での新しい指導方法として、また不登校や特別支援教育を実施する上での学び方の選択肢を増やす上で、オンラインによる指導に期待を抱いている学生が多いことが分かった。また、氏間研究室の教育相談においてオンライン指導を企画、実施し、そこに学生を参画させたことは、オンライン指導の効果、オンライン指導のノウハウを認識し、個別のニーズへの対応にとって必要性を実感する機会となったと考えられる。これらの経験を通して、オンライン指導は、教員として身につけておくべき技能であり、自身でも身につけたいと考え、最終的にその必要性を実感したものが考えられる。

最後に、自由記述で、氏間研究室が実施する教育相談についての感想を紹介する。

在学生の感想は以下のとおりである。

- 特にオンラインでの教育相談を見学して距離的な問題や不登校など幅の広いニーズに対応できるので

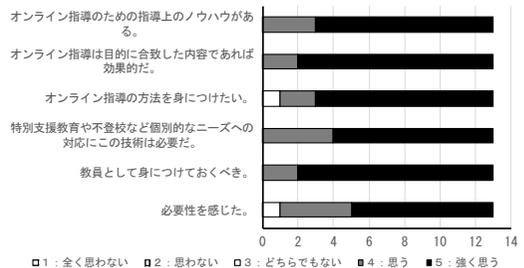


Fig. 5 オンライン指導についての考え

Table 2 在学生（教育相談経験2年以上）（N = 9）

1：全くそうは思わない、2：そうは思わない、3：どちらともいえない、4：そう思う、5：とてもそう思う。

	1	2	3	4	5
【特別支援教育に関する実践力について】					
1 教育相談により教職の魅力が高まっている。	0	0	1	2	6
2-1 教育相談に参加して、子供の実態の評価の方法について身につけている。	0	1	1	3	4
2-2 教育相談に参加して子供の指導法が身につけている。	0	0	3	3	3
2-3 教育相談に参加して指導の評価法が身につけている。	0	1	3	5	0
2-4 教育相談に参加して記録の取り方が身につけている。	0	0	2	2	5
2-5 教育相談に参加して障害に基づいた支援法の考え方が身につけている。	0	0	2	6	1
【教育での ICT 活用についての学びについて】					
3-1 教育相談に参加して教育での ICT 活用の意義を学んでいる。	0	0	1	1	7
3-2 教育相談に参加して教育での ICT 活用の方法を学んでいる。	0	0	0	4	5
3-3 教育相談に参加して教育での ICT 活用の効果を学んでいる。	0	0	1	1	7
3-4 教育相談に参加して教育での ICT 活用の必要性を学んでいる。	0	0	0	3	6
3-5 教育相談に参加して教育での ICT 活用のために学んでいくことの必要性を感じている。	0	0	0	0	9
【就職後への影響について】					
4 教育相談に参加して将来に活かせると思う。	0	0	0	3	6

はないかと感じた。対面で行う場合とは異なるノウハウについて考えることが重要だとも感じた。

- 小学生の児童や中学生の生徒さんのケースに対応した際、個別の対応によって子どもの課題やニーズが鮮明に見えたと感じた。さらに保護者の方とやり取りから、家庭で見られる子どもの実態。家庭で保護者が苦勞されていること・保護者がどのような視点で、どのような将来を子どもに望み、子どもの頑張りをとらえているか。学校生活に対して、保護者から見た学校の適切な対応や保護者が有難いと感じる配慮・保護者から見て、学校が適切な配慮をしていない、ともどかしさを感じていることといった、保護者から見た子どもの実態と学校（または教育相談）に対するニーズを聞き、教育相談の意義や指導者に求められるものを学ぶことができた。
- 学習に困難を抱えている子どもが心の中で思っていることや、葛藤していることについて考えたり、少し理解したりすることができたと思う。子どもの頑張りをしっかり聞き、認めたり褒めたりすることの大切さを強く感じている。
- 学生にとっても学びの場であると思います。支援がうまくいったときや、子供にあった方法がわかっ

たとき、こちらも嬉しくなります。学生のうちから子供と関われる機会があることは非常にありがたい環境だと感じています。

卒業生の記述は以下のとおりである。

- 自分が主体的に指導したり、人の前で話す経験ができてよかった。講義の話を実践する場を持てた。学生という立場であったのに、たくさん任せていただけたので、良いプレッシャーを感じながら楽しく学べた。氏間ゼミに所属していることをひしひしと感じられて、自己肯定感が上がったと思う。教育相談中やその前後に氏間先生と話すことで、さらに信頼関係が深まったように思う。そのおかげで、学ぶことへの意欲がとても高まった。
- いつもお世話になっております。教育相談をはじめ、氏間先生と繋がりを持たせていただいたことで、今も子どもたちの ICT 活用のお手伝いをさせていただくことができています。
- 直接の指導に関することはもちろんだが、それまでの準備や保護者の方との会話など、自分がやることで知ることが多くあり、社会に出て必要と感じるコミュニケーション能力なども身につけていくこと

Table 3 在学生（教育相談経験1年未満）（N = 9）

1：全くそうは思わない、2：そうは思わない、3：どちらともいえない、4：そう思う、5：とてもそう思う。

	1	2	3	4	5
【特別支援教育に関する実践力について】					
1 教育相談により教職の魅力が高まっている。	0	0	4	4	1
2-1 教育相談に参加して、子供の実態の評価の方法について身につけている。	0	0	4	4	1
2-2 教育相談に参加して子供の指導法が身につけている。	0	0	6	3	0
2-3 教育相談に参加して指導の評価法が身につけている。	0	1	6	2	0
2-4 教育相談に参加して記録の取り方が身につけている。	0	0	5	3	1
2-5 教育相談に参加して障害に基づいた支援法の考え方が身につけている。	0	0	4	5	0
【教育での ICT 活用についての学びについて】					
3-1 教育相談に参加して教育での ICT 活用の意義を学んでいる。	0	0	1	5	3
3-2 教育相談に参加して教育での ICT 活用の方法を学んでいる。	0	1	3	3	2
3-3 教育相談に参加して教育での ICT 活用の効果を学んでいる。	0	0	4	2	3
3-4 教育相談に参加して教育での ICT 活用の必要性を学んでいる。	0	0	2	3	4
3-5 教育相談に参加して教育での ICT 活用のために学んでいくことの必要性を感じている。	0	0	1	2	6
【就職後への影響について】					
4 教育相談に参加して将来に活かせると思う。	0	0	3	4	2

Table 4 卒業・修了生（N = 10）

1：全くそうは思わない、2：そうは思わない、3：どちらともいえない、4：そう思う、5：とてもそう思う。

	1	2	3	4	5
【特別支援教育に関する実践力について】					
1 教育相談により教職の魅力が高まった。	0	0	1	4	5
2-1 教育相談に参加して、子供の実態の評価の方法について身につけた。	0	0	0	4	6
2-2 教育相談に参加して子供の指導法が身につけた。	0	0	1	4	5
2-3 教育相談に参加して指導の評価法が身につけた。	0	0	2	5	3
2-4 教育相談に参加して記録の取り方が身につけた。	0	0	0	4	6
2-5 教育相談に参加して障害に基づいた支援法の考え方が身につけた。	0	0	1	2	7
【教育での ICT 活用についての学びについて】					
3-1 教育相談に参加して教育での ICT 活用の意義を学んだ。	0	0	0	1	9
3-2 教育相談に参加して教育での ICT 活用の方法を学んだ。	0	0	1	2	7
3-3 教育相談に参加して教育での ICT 活用の効果を学んだ。	0	0	1	2	7
3-4 教育相談に参加して教育での ICT 活用の必要性を学んだ。	0	0	1	0	9
3-5 教育相談に参加して教育での ICT 活用のために学んでいくことの必要性を感じ、実践している。	0	0	0	1	9
【就職後への影響について】					
4 教育相談に参加して将来に活かしている。	0	0	1	1	8

ができた。

- 短い期間でしたが、大変多くのことを勉強させていただきました。教育相談での実践的な経験は、教師になった時に役立つことばかりだと思います。主担当や記録などチームで動くということも、仕事をしていく上で重要だと思います。貴重な経験を今後活かしていけるよう、自分自身、精進していきたいと思っています。

IV まとめ

以上、本センターにおいて民間研究室で実施してきた教育相談・学習支援の活動について、本学学生に対する教育効果についてまとめた。教育相談年数が2年以上で1年未満の者と比較し、教職への魅力、指導力の獲得、教育へのICT活用力の獲得、将来への貢献の全ての項目についてポジティブな解答の割合が高かった。これは、教育相談参加年数が教育効果に与える影響が高まったと予想される。このことから、教育相談は数年続けることが重要であることがわかる。ICTは動画を活用できることから学校の授業に取り入れ、授業中の児童の理解に役立ち、興味を高めることができることとされている(土佐・野島・廣野、2020)。コロナ渦の現在においてICTの要素は高まるばかりであるため、教育においてもICTのニーズは高まると考えられる。教育相談でも学校と同様のICT技術を指導できるよう、学生に指導等、積極的に行う

ようにしたい。公平な教育の機会を守るための方法を具体的に提案することで、学習上の困難を改善・克服し、意欲的に学びに向かう子供たちが1人でも増えること、併せてその指導に携わることで、教職への意欲や実践力の向上に貢献できるよう引き続き精進していきたい。

謝辞

本実践へのご参加、アンケートへの回答へのご協力を賜り関係者の皆様には感謝申し上げます。

本研究はJSPS科研費18H01040、19H00623の助成を受けたものです。

文献

- 今栄国晴・清水秀美(1994)教育実習が教員志望動機に及ぼす影響. 日本教育工学雑誌, 17(4), 185-195.
- 文部科学省(2010)生徒指導提要.
- 西尾美紀・安達智子(2015)教職志望大学生の教師効力感変化に影響を及ぼす要因の検討. 大阪教育大学紀要, 64(1), 1-11.
- 土佐幸子・野島優作・廣野達也(2020)小学校理科学習における粒子モデルとICT活用—ものの溶け方の単元において—. 新潟大学教育学部研究紀要, 13(1), 99-115.

(2021.2.1受理)

**Educational Effects on University Students by Educational Counseling:
Results of Questionnaire Surveys for Student Participants in Sansan-Kyoushitsu (SUNSUN Class)**

Mai IMAZU

Graduate School of Education, Hiroshima University

Kazuhito UJIMA

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University

Questionnaire surveys were held to examine educational effects on university and graduate students who participated in educational counseling ($N = 28$.) The three research items were as follows: teaching skills for class, literacy for Information and Communication Technology (ICT) for teaching classes, and contribution when they became a teacher. The purpose of this research was to clarify how experience periods of participation in educational counseling activities influenced educational effects on students. The results of this survey indicated that students with two-year or longer participation had increased effects. Students who participated for two years or longer gained the same results of graduates and were expected to contribute to the teaching profession after leaving university. Although participating several times in educational counseling exerted effects to some extent, this investigation suggested that continuous participation for several years could exert more pronounced effects. Taking these findings into account, we will guide students to enhance the teaching profession with the benefits from experiences of engaging in educational consultation.

Keywords: Educational advising, Educational effects, University students, ICT

